

聖書宣教会通信

〒205-0017 東京都羽村市羽西2-9-3 Tel 042(554)1710 Fax 042(554)5562 振替・00150-6-34971

巻頭言

「主のことばを聞くことのききん」(アモス8:11)

聖書神学舎教師会議長 津村俊夫

アモスの時代のイスラエルは、ヤロブアム二世の治世で、周辺のエジプトやアッシリアという大国が弱体化していた間隙を縫って一時的に繁栄を享受していました。物質的に栄えると共に宗教的に墮落して、貧富の差が拡大し、強者が弱者を痛めつけている社会でした。そのような中で、アモスは主に遣わされてイスラエルに神のさばきを語ったのです。

「見よ。…その日、わたしは、この地にききんを送る。パンのききんではない。水に渴くものもない。実に、主のことばを聞くことのききんである。」(8:11)

今の時代はどうでしょうか。「みことば」に聞いているようで、実は聞いていないということはないでしょうか。聞く者が、自分で勝手に聞いてしまって、本当に聞いていない、いや、聞くことができない。私たち信仰者も、著者が伝えたかったメッセージ(著者の意図した意味)が何であったのか、究極の著者であられる神が何を伝えようとしておられるのかを、忍耐して聞き続けることを放棄してしまっていないでしょうか。この世の「何でもあり」(Anything goes)の相対主義を受け入れて、あとは「複数の読みの可能性」のあいだで「選択する」ことこそ解釈であると開き直っていないでしょうか。

聖書の解釈も「この世」から大きな影響を受けているように思われます。注解書の中には、注解者が、ヘブル語・ギリシャ語本文と「正面から」向き合うことなしに、「複数の読みの可能性」のあいだで「選択し」、自分の好みに合う説明をしているものがあるかもしれません。

注解者がそうであれば、注解書を読んで説教をする説教者たちも、複数の注解書を読み比べて、自分の好みに合う説明を説教の中で披露しているだけであるような場合があるかもしれません。注解書が言っていることは、本当に聖書本文が言っていることなのか。本末転倒も甚だしいですが、今の時代こそ、聖書本文によって

注解書の真偽をためさなければならぬような時代です。もっとも、「真偽」を問い、「本末」を定めるといったことなど意味がないとありますが。

説教者がそうであるだけではありません。説教を聴く私たちが、時代精神の影響下、「複数の読みの可能性」のあいだで、自分の好みに合う解釈は受け入れるが、そうでないものには耳を閉ざしてしまう、ということがないでしょうか。それも、無意識的に。

「主のことばを聞くことのききん」。アモスは言います。「彼らは海から海へとさまよい歩き、北から東へと、主のことばを捜し求めて、行き巡る。しかしこれを見出せない。」(8:12) 牧師、伝道者がまず「みことば」に本当に聞くために、聖書に「正面から」向き合うことが必要ではないかと思います。「みことば」の宣教のために、語る前に「みことば」にどこまでも聞き続けて行く者でありたい。そのためには「どんなことでもする」者でありたいと思います。

「その日には、美しい若い女も、若い男も、渴きのために衰え果てる。」(8:11-13) 人々の「渴き」が真に癒されるために、「わたしのもとに来て飲みなさい」(ヨハネ7:37)と言われるお方、主イエス・キリストのもとに人々をお連れするために、私たち自らがまず主のことばに親しく聞くことができるようにと願う者です。

「モリヤ問題」の報告書を共同で纏めていく中で、主のあわれみのうちに創立50年を迎えた聖書宣教会の原点をあらためて確認させられています。聖書宣教会が「聖書に聞き」・「聴き従っていく」ことによって、「みことば」に仕える、主のしもべの育成のために、ふさわしく整えられるようにお祈りください。



昨年度に9名（本科6名、シニアコース3名）の研修生を学舎から送り出し、今年度は、同数（本科8名、聖書科1名）の研修生をお迎えしました。そのうち5名が家族寮に入寮しましたので、小さなメンバーも増え、学舎が賑やかになりました。現在、韓国とスコットランドから、日本での宣教に重荷を覚えて学ぶ研修生もいます。教会音楽科には、残念ながら、研修生が与えられませんでした。これまで岳藤豪希先生が導いて来られた「みことばに仕える教会音楽」という理念の大切さは、時代が移り、人々の関心やニーズが変化しても、見失われてはならないと信じます。

歴史は繰り返します。教会の営みは、「みことばに基づいて」という原理と、「世の人々の必要に応じて」という願いのなかで、進められてきました。両者への配慮を疎かにしてよいと考える人はいないでしょう。しかし、その理解や関心のバランスが次第に崩れて行くということが、確かにあるのです。だからこそ、「みことばに基づくこと」の中心性を叫ぶ荒野の声を、途絶えさせてはならないと思います。「福音主義」という在り方の内実が、いつの時代においても問われています。この問題意識を共有し、重荷をともに担ってくださる諸教会から、明日

を担う献身者が起こされることを、切に祈り求めています。

今年度より、「聖書科」（従来の聖書科は「聖書講座」と改名）を開設しました。現在1名の研修生が学んでいます。これまでのシニアコースのカリキュラムを改定し、みことばに仕える訓練の面を充実させ、聖書語学（ヘブル語、ギリシヤ語のいずれかを選択）と原典釈義（旧約、新約のいずれか）のクラスを必須としました。教会の多様な働きに仕える献身者の育成のために、この学科が用いられることを願っています。

例年6月に行われる特別講義に、ドイツ人の科学者 Werner Gitt 先生をお迎えし、「はじめに情報ありき」、「科学者である私と聖書」というテーマで講義をしていただきました。講義2日目には、D・リトル先生が「アリスト・マクグラスの神学」についてお話をいただきました。

7月8日から10日には、奥多摩福音の家を会場に夏期研修講座が行われます。昨年に引き続き、「釈義から説教へ」をテーマに掲げますが、各講義が取り上げる主題を「祈り」としました。また、7月23日から25日にかけて開かれる教会音楽夏期講習会も、教会に仕える音楽奉仕者のために豊かに用いられるようにと願っています。

「学びと訓練」

研修生活部主任 赤坂 泉

単身寮の朝は早天祈祷会から始まります。賛美と聖書と奨励と祈りの交わりの中で主の前に出る、毎朝の恵みです。家族寮では週一回の早天祈祷会と月一回の夜の祈祷会があります。寮生活や係活動、教会奉仕やその他の自主的な活動等とその場面は拡がります。食事から図書や施設の管理まで多様な場面で、仕えることを学びます。奉仕教会で、路傍伝道で救霊のわざにあずかり、寮生活や教会奉仕で人と向き合い、自己に直面させられます。

聖書神学舎における「学びと訓練」は、教室とチャペルとこれらの多様な場面で実を結んで行きます。

研修生の歩みに同伴しながら、一人一人が「ほんとうに知る」ことにおいて成長するように、と祈っています。みことばと向き合って、なお深く主を知り、主のみこころをほんとうに知ること、ひとを知ること、そして自分のほんとうの姿を知って失望すること、そこで主のあわれみを知ることを。

成長させてくださる神に期待して、祈り、注ぎ、待ち、また祈り、見守り、という教師の歩みです。この学舎で、みことばの学びと霊的訓練とが相乗して、真に主を恐れ、主にのみより頼む献身者、奉仕者が整えられますように、と祈っています。

舟喜信先生を偲んで

川越聖書教会牧師・聖書神学舎教師 岸 本 紘

舟喜信師は3月26日夜半79歳の生涯を了えて御国に召されました。最期はご家族と泣いたり笑ったり賛美したりの5日間であったとのこと。1928年9月28日、舟喜麟一、ふみ師夫妻の五男一女の四男として前橋に生まれ、東京高等師範（現筑波大学）卒業後、母校前橋高校で世界史・社会科の教師として人気を博し、校内聖研では主を信じる人々が起こされました。やがて献身の志が与えられ米国ホイートン大学院に留学、旧約学を修めて1957年に帰国、翌58年の聖書神学舎設立に参加なさいます。学舎の創立50周年の年に先生が召されたことは残念であります。1960年春からは浜田山教会牧師としても長く奉仕されました。また戦後の欧米やわが国で福音的な教会が学問においても力をつけて行く、その中心に先生はさりげなく位置を占めておられました。

私の入学当初、信先生は学生寮の舎監でもありました。よく庭を掃いておられ、「掃除はいいよ。説教の準備と違って結果が目に見えるから」と仰ったりしました。隣接グラウンドでの恵子夫人とのテニスでは、力のこもった打ち合いが見ものでした。ジョギングもお好きで、それがそのまま遠くの家までの訪問となり、相手を驚かせたりもしました。

何よりも忘れられないのは、今や伝説となった火曜夜の学生祈り会です。そこでは信先生の真髓がいかに示され、説教はまさに鋭い両刃の剣でした。終わったあとで悔い改めと謝りに行ったこともあります。また夏休みのペンキ塗りを手伝われたとき、きれいになったと喜ぶ先生に私が気のない返事をすると、「福音的な話し方じゃないねえ」、「いや、こんなことをいうのも律法的か」と、やさしく仰いました。大体がそういう接し方をする方針だったと説教集の中でも仰っています。恩師テニー先生、エドマン先生、そしてお母さん舟喜ふみさんの影響が大きかったものと思います。

先生は卒業生一人一人を気遣い、中でも順調に行かず苦戦する卒業生ほど心にかけて、「彼は本当によく戦っているねえ」と仰るのが常でした。それは晩年まで変わりませんでした。真の神学教育者の姿がそこにありました。

舟喜信先生の説教は独特でした。静かに始ま

り、綿密に論理を積み上げ、そこに品のよい体験を織り込み、やがて速度と迫力を増し、うなり声をあげるようにしてたたみかけ、一気にクライマックスに達します。さながら旧約の預言者のようでした。こうして十字架の贖いが示され、見えざるにいます聖なる方の前に私たちを立たせるのでした。

先生は宗教っぽいことを恥じ、それらしい演出、ことさらに仕組んだ方法を嫌いました。個人の信仰が教会という共同体でどう実を結ぶかに大きな関心を持ちつつ、他方で、この共同体は聖なる神ご自身によるものだという一点を譲らず、人為的操作を避けようとなさいました。

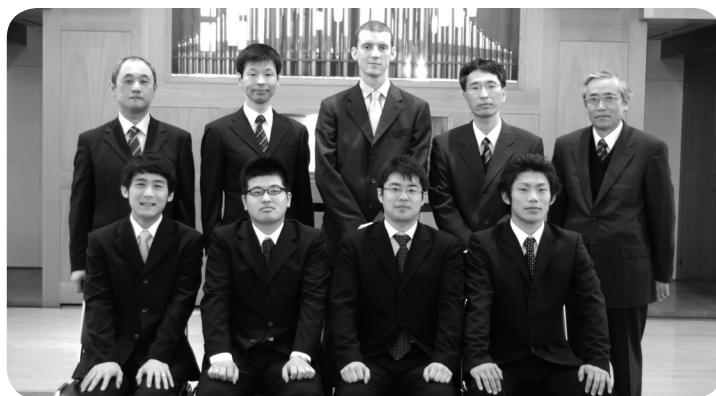
信先生の説教の中心には常に「人生の苦難」「不信仰の自覚」という二つのテーマがありました。そして先生ご自身、思いがけない労苦を通されます。2002年春には恵子夫人を先に天に送りました。また、立場上さまざま痛みと試みがありました。「近頃、考えや文章がまとまらない」と仰ることがありました。すでに病が始まっていたのかもしれませんが。やがてその病氣と戦うため名古屋のご長女、末松師一家のもとに移られます。今思えばギリギリのタイミングでした。いつだったか、ご家族から電話がありました。「今、パパと替わりますね」。電話に出た先生は相手を認識できないようでした。「遠くに行かれてさびしいです」と言っても、もう先生には名古屋も羽村もなかったのです。悲しいことでした。けれども浜田山の昔からの人たちが信先生は世の煩いを終えて祝福の中にいらっしゃるのだと言っていると聞き、そうなのだとも思いました。

私たちはだれもが「自分は先生にとって特別だ」と思いました。先生はみんなにそう思わせたのです。事実、先生は一人一人を大切に考え、祈ってくださいました。「労苦は主にあって無駄ではない」。信先生の生涯と労苦とは、このみことばを私たちにあかししています。主が私たちに先生と出合わせ、その薫陶を受けさせてくださったこと、先生からキリストを示していただいたこと、それらをもって満足し、感謝し、主の御名をあがめましょう。

舟喜信師葬儀前夜式 2008-03-27

『労苦と勝利』(Iコリント15:50-58)より

2008 年度 新入会生



後列左より、佐藤、濱川、ブラッシュ、和田、若林
前列左より、老松、児玉、加藤、伊東

氏 名	出 身 教 会	奉仕教会
(聖書神学舎本科) [8名]		
伊 東 勝 哉	信愛キリスト教会 (単 立)	永福南キリスト教会
老 松 望	相原キリスト集会 (単 立)	相原キリスト集会
加 藤 秀 典	生駒めぐみ教会 (日本同盟基督教団)	多 磨 教 会
児 玉 武 志	二宮山西キリスト教会 (日本福音キリスト教会連合)	二宮山西キリスト教会
佐 藤 陽 一	東 京 聖 書 教 会 (単 立)	東 京 聖 書 教 会
濱 川 昌 彦	桐生キリスト福音集会 (単 立)	相原キリスト集会
ブラッシュ・リチャード	追 浜 聖 書 教 会 (日本同盟基督教団)	追 浜 聖 書 教 会
和 田 孝 之	岸和田聖書教会 (福 音 交 友 会)	青 梅 キ リ ス ト 教 会
(聖書神学舎聖書科) [1名]		
若 林 正 一	上田福音自由教会 (日本福音自由教会協議会)	上田福音自由教会

新入会生のあかし

「いざ日本へ」

ブラッシュ・リチャード

私はスコットランド生まれで、幼い時に国教会で幼児洗礼を授かりました。しかしクリスチャン・ホームではありません。赦され、信仰へと導かれたのは18歳の時の青年キャンプでした。大学で後に妻となる日本人女性と出会いました。彼女との将来を考え、卒業後英語教師として日本に行くことにしました。来日してからすぐに追浜聖書教会に通い始め、最初は英語礼拝だけでしたが、結婚してから日本語礼拝にも出席するようになりました。2004年のイースターに洗礼を受け、追浜聖書教会員となりました。

献身の道を常々考えていた私たちは牧師と相談した結果、スコットランドの神学校に導かれました。在学中、三ヶ月の短期宣教実習を仙台で行う機会が神様から与えられました。益々日本への重荷を感じた私は、神様の導きを待ちつつサラリーマンをする傍ら、在英邦人伝道にも励みました。そこで追浜聖書教会の牧師の勧めで聖書宣教会での研修への道が開かれました。

「みことばを真直ぐに説き明かす働き人」

若 林 正 一

私は、37年間の銀行勤務の関係で各地に移り住みましたが、1990年の4月に埼玉県浦和市から長野県上田市の自宅に帰って来ました。その際に、家内を通じて、イザヤ49:19「あなたの廃墟と荒れ跡と滅びた地は、いまに人が住むには狭すぎるようになり…」のみことばが与えられ、自宅礼拝を開始しました。その後、順次与えられた3人の宣教師や2人の牧師と兄弟姉妹達と共に、教会開拓の奉仕をさせていただきました。

その間、自らの定年後の働きについて祈ってきましたが、II テモテ2:15「真理のみことばをまっすぐ説き明かす、恥じることのない働き人として、自分を神にささげるよう、努め励みなさい」のみことばが与えられ、聖書を体系的に学び、みことばを取次ぐ奉仕につきたいとの思いが与えられました。

私は、永遠のいのちに至る食物のために働くために、牧師を補助する伝道者として召されていると信じ、宣教会での学びに励みたいと思います。

2007年度 卒業・修了生



後列左より、谷口、吉永、熊久保、山里、柏倉
前列左より、山尾、真島、鈴木、池田

氏 名	奉 仕 先
(聖書神学舎本科卒業) [7名]	
池田 ^{のりお} 憲 ^お 生 ^し	宮崎めぐみ聖書教会 (日本同盟基督教団)
熊久保 ^{よしきみ} 公 ^よ 義 ^し	松見ヶ丘キリスト教会 (日本福音キリスト教会連合)
谷口 ^{ふみ} 峰 ^ふ 夫 ^と	伊勢バプテスト教会 (日本バプテスト宣教団)
山 ^{やま} 里 ^{ざと} ^{まさ} 将 ^{ゆき} 之 ^{あつ} き ^ぎ	厚木緑ヶ丘キリスト教会 (日本福音キリスト教会連合)
吉永 ^{こう} 光 ^き 生 ^き	前橋キリスト教会 (日本福音キリスト教会連合)
山尾 ^{こう} 研 ^き 一 ^し	町田聖書キリスト教会 (単立)
(聖書神学舎シニアコース修了) [2名]	
柏倉 ^{かしわぐら} 秀 ^{しゅう} 吉 ^{きち}	ポニタ日系聖書教会宣教師候補 (保守バプテスト同盟所属)
鈴木 ^{すずま} 善 ^{ぜん} 雄 ^{ゆう}	東松山福音教会 (日本福音キリスト教会連合)
真島 ^{まじま} 秀 ^{しゅう} 泰 ^{たい}	東京渋谷福音教会 (日本アライアンス・ミッション)

卒業・修了生のあかし

「みことばにこそ力がある」

吉永^{こう}光^き生^き

聖書宣教会での歩みは、主のみことばにこそ力があることを確かにされる歩みでした。机上の学びだけではなく、全ての営みを通して主がそのことを教えてくださいました。宣教会においても、教会においても、様々な問題に直面させられましたが、それは結局自分の罪と向き合い、悔い改めを迫られることでした。その度ごとに人のことばではなく、神のことばが人を生かし人を育てることを目の当たりにさせられた

ように思います。自分自身を見れば主の前にふさわしい者ではありえない。しかし、みことばを通して働かれる主が確かにいてくださるという確信を得られたことは大きな恵みでした。

卒業を前にしても献身者としてふさわしい者ではないことを自覚させられています。これからも生涯にわたって訓練される必要があります。主がみことばを通して私を救いに導き、また、みことばを通して召してくださったことにいつも拠り頼みたいと思われています。

「神様に赦(許)された者として」

池田 憲生

聖書宣教会で受けた恵みは、一言では言い尽くせない。あえて短くまとめると、それは、神様の赦(許)しを深く覚えた時であると言える。神学校で教えられる学びは深く、汲みつくすことができないくらい奥深いものであった。自分の能力の足りない中で、なおも学ぶことを許してくださっていることを覚えた。

寮生活においては、信仰を分かち合う友との出会いがあった。兄姉同士がぶつかり合う場面もあった。そのような時には、私自身が神様に問われた思いがした。「赦し合え」と命じられているのに、友を赦せなかった自分の心の狭さを覚えた。私は友から赦されているということ、気づかないで過ごしていたこともあった。そのような中で、主イエスの十字架によって、何よりも自分が赦されていることを、宣教会の寮生活の中で深く味わわせていただいた。神様の赦(許)しの中で、私の神学校生活の支えのために祈ってくださり、お交わりをいただいた方々に感謝する。

「みことば、驚き」

熊久保 公義

宣教会の門をくぐり4年。これまでに愕然とさせられたことを二つ挙げたい。

一つ、「神様。こんな罪人の私をあわれんでください(ルカ18:13)」。母教会の祈祷会に久しぶりに出席した時のこと、私は神学生として、言葉に注意し、神の属性をとうとうと祈る。続いて別の兄弟が、言葉につまりながら一言「神様、私をあわれんでください」。ああ、主の目にきよいのは彼だ、と愕然。一体何を学んできたのかと自らに問うた。

二つ、「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた(Iテモテ1:15)」。自らの一向にきよくならない様のためにため息を重ねていた際、このみことばが目飛び込んできた。「罪人を救うために」。この言葉を初めて読むかのようにして何度も読み返す。そうだ、キリストだけが罪人を救うのだ。私は罪人だが救われた。当たり前の事実には驚き、涙。

みことばが真実であることを学んだ4年間。卒業後も神のことばに驚く者でありたい。

「信仰者のあかし」

谷口 峰夫

聖書宣教会への入会を志したのは、聖書そのものを学ぶことと併せて、宣教会の先生方から教えて頂きたいとの願いがあったからです。

振り返れば、この4年間は宣教会にとって苦難の連続でした。これらの出来事は人を失望させるものでもありました。しかし、問題に直面する度に、みことばに立って自己吟味をする先生方の姿が私たちの前にありました。授業などの学びの機会以上に、みことばに根ざして歩む先生方の姿勢から、主に仕える者にとって大切なことを教えて頂いたように思います。伝道牧会の場では、より実践的な知識が求められるとも言われます。

しかし、「神をどのようにして知り、神とどのように向き合おうとするのか」。このことが最も大切なのだと教えられ感謝しています。主の働きの現場では様々な出来事に遭遇することでしょう。しかし、どのようなことを通しても、主のみことばだけが真実であることをあかしする者とならせていただきたいと願っています。

「あなたは、どこにいるのか。」

山里 将之

いつも、嘆き叫んでいた気がします。散歩に出かける様にして実は、川原や、今は行けなくなった裏山、人ごみの中で、神様との大喧嘩。さながら、ペヌエルでのヤコブ。

なぜわかってもらえないのだろう。なぜ伝わらないのだろう。なぜこんなにも。

心の涙は止まず、かつての古傷も疼き、直接的な答えは何も示されないまま、献身を、いや、信仰そのものを揺さぶられ、もう投げ出した方がいいとさえ願った日々。

けれども、いつかの赤坂先生のクラスで分かち合わせていただいた、神のみことば。「あなたは、どこにいるのか。」アダムに罪の所在を問うたこのことばがなぜか、私にとって励ましとなりました。

「聖書宣教会にいます。この罪人は今なお、ここで学んでいます。」あわれみの入会。あわれみの4年間。そして、あわれみの卒業。この罪人をかくもあわれんでくださった主の愛、諸師の忍耐、諸兄姉の友情に感謝。

「みことばに聞く」

山尾 研一

無牧の教会から献身へと導かれ、最後まで学びを続けられたことは、ただ神様の恵みとあわれみでした。教会をどのように牧会するか。現場で役立つノウハウ的な知識を期待して入会しましたが、宣教会で教えられたことは、ただ「みことばに聞く」でした。しかも時間と忍耐のいる原語の学びと釈義によって、聖書に啓示されている神の御旨に聴く姿勢です。先生方は、授業やチャペルの説教などを通じ自ら模範で示し教えてくださいました。職員の方々は、一日一日の歩みの中で、主に「仕える」忠実なしもべとして、学びの環境を整え支えてくださいました。

このような恵まれた環境を与えられたにもかかわらず、自らの弱さと罪のゆえに十分学び取ることができませんでした。残りの人生は、宣教会で教えていただいたことの復習と、「みことばに聞く」姿勢でもって、奉仕していきたいと願われています。4年間の歩みを祈り支えてくださったお一人ひとりに感謝しつつ。

「聖」

柏倉 秀吉

この四年間で最も教えられたことは、「主は『聖』なるお方である」ということです。それは、一方で『真実』（「……彼は常に真実である（Ⅱテモテ2:13）」）であり、また『愛』（「……敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。……天の父は、悪い人にも良い人にも太陽を上らせ、……雨を降らせてくださる……自分を愛してくれる者を愛したからといって、何の報いが受けられるでしょう。取税人でも、……異邦人でも同じことをするではありませんか。……だから、……天の父が完全のように、完全でありなさい（マタイ5:44-48）」）でもありました。そのような意味で、私は本当に『聖』くありませんでした。人を赦すことができず、かえって裁く者でした。しかしその結果は、悪意に支配され、良心が麻痺している罪人の姿でした。このことに気づかされた時に、主の真実と愛と聖さを改めて知りました。主は『聖』なるお方です。私もそうありたい。

「夕暮れ時」

鈴木 善雄

地上の歩みはいずれ暮れる。私たちの主イエスは全ての人を愛されている。勿論、夕暮れ時の人をも。しかし人格がないがしろにされている現実がある。救いの喜びはこれらの人にも伝えなければならない。いや、夕暮れ時の人にこそ伝えたい。そこに向かうべき思いをもって主の働きに召され、宣教会へと招かれた。私で良いか、との思いを持ちつつの学びであった。

しかし、学びによって、聖書の無誤無謬を確信できた。それは、主にのみ拠り頼む信仰の確固たる礎である。聖書を原語で学ぶことによって、靈感されて書かれた聖書を通して主の「みこころを尋ね求める」ことができる恵みを味わうことが出来た。身震いするほどの、大いなる恵みであり、喜びであり、感謝である。この意味からするなら私の学びは不足だらけである。やっと端緒についたばかりと言わざるを得ない。学びを続けつつ、夕暮れ時の魂に向かい合いたい。イエス・キリストをあかす歩みをしていきたい。

「聖書宣教会での学び修了のあかし」

真島 秀泰

神学もギリシャ語もヘブル語も何一つ知らない者が、長年親しんできたみことばの真意を解き明かす術を学んだことは、誠に貴重な宝と思っています。在校の3年間は、唯々諸先生方、同級生、研修生諸氏の暖かい愛のうちにあった事を覚えて、感謝にたえません。74年間の人生、48年間のクリスチャン生活を通して、この3年間の学びほど興味と情熱と生き甲斐をもって、且つ主から来る平安と喜びの内に過ごした事はなかったと思います。まさに、私にとって、信仰人生の故郷です。献身を決心するとき漠然と期待した、顕在的な神の恵みのみわざを体験した思いです。

(1) パーキンソン病の辛らつな症状が現れたとき、宣教会の兄弟姉妹たちの祈りによって支えられ、癒しを得たと思われている。

(2) 今日の卒業式を迎えたこと。

(3) 砕かれたこと（祈りの課題）：

- ・自信過剰：万事努力しなければ下手な自分。
- ・自己中心：仕えあっている仲間たちの姿で気付く。
- ・愛の無さ：仲間たちの如才ない姿で気付く。

二十歳くらいの時に、牧師、宣教師のちょっとしたひとりで勝手に不信感を抱き、所詮、教職者も人間なんだ、と思っていた私が神学校に勤めることになるとは、考えもしなかったことでした。聖書宣教会で働く、というお話があったときも真剣には受け止めず、その時の職場で続けて働くことしか考えていませんでした。

ところが断るつもりでかけた電話で、何かのがれられない力を感じたのか、結局、宣教会で働くことを引き受けてしまったのです。そして行った所が壊れそうな浜田山の学舎。事務所も、地震があったら壊れるかも、と思わせるような所でしたが、何か他とは違った空気を感じられたような、そんな所でした。

羽村に引越した夏休みに、引越荷物が片づいていない食堂で会議をしたり、特別講演会の準備をしたり、今は懐かしい思い出です。明日振り込むお金がない…、そんな時に必要な額の振り込みがあったり、本当に主の助けを実感させていただきました。振込用紙に書かれている皆さまのひと言に励まされたり、生意気な私にも誠実に接して下さる先生方に教えられたり、沢山のことがありました。苦しいことも悲しいこともありました。誰にも分かってもらえ

ない、表現できないくらいにもありました。でも、結局、それも私のかたくなさに対する、主のお取り扱いだったのです。

働く中で何を得たのか、何を教えられたのか、ひと言では表現できないと思いますが、働き始めたころからお世話になった先生方(召天された数名の先生方を含みます)の信仰者としての姿勢から、キリスト者として生きる姿勢、また何よりも自分が神さまの中に生き動き存在してる、主が神であられる、ということだったのだと思われています。

今は牧会の現場、といわれるところにおります。来てみて、本当に宣教会が大切にしてきたものを守って行くことの大切さを感じています。宣教会には「礎はキリスト」という定礎の石がありますが、このとおりに自分も歩みたいと思います。そしてこれからも宣教会はこの礎の上をしっかりたたえられていって欲しいと願っています。

(職員であった池田姉は、今春、結婚退職して、卒業生の池田憲生兄とともに九州に遣わされました。多年の忠実な奉仕を主に感謝し、歩みの祝福を祈ります。A)

聖書宣教会のために祈ってくださる皆さまに心から感謝しています。 近況と祈りの課題をお届けします。

- 2007年度決算報告を、主をあがめつつ、皆さまへの感謝とともにお届けします。引き続き、すべての必要が主が満たして下さるようお祈りください。
- モリヤに関連した諸問題の最終報告書が間もなく整います。痛みと悔い改めの中から、主の真実を確認して御名をあがめ、皆さまの祈りと協力に励まされ、主と主の教会との期待に押し出されている思いです。
- 2009年度からの新体制に向けて整備を進めている課題が多数あります。御声に正しく聴き従う歩みであるようお祈りください。
- 研修生と教職員のため、責任役員と評議員のため、日本と世界の各地に遣わされて主に仕えている同窓生のために、主の助けと導きが豊かでありませうようお祈りください。
- 困難な時代に福音を託されて歩む主の教会の上に、主の助けと祝福が豊かにありますように。

編集後記

春は「変化」の季節です。教職員にも研修生にも多くの変化を経験した今春ですが、主の確かな守りをいただいていることを認めて、御名をあがめています。

調整や改革においては柔軟であり、信仰者の視点

と優先順位においては頑なでさえあることを、どちらも手放さずに歩みたいと願います。

皆さまの経験する変化の上にも、主の守りと祝福がありますようにお祈りします。(A)